

『竹取物語』の物語性 —「罪」を中心に—

倪 錦丹

かぐや姫はなぜ地上にきたかということは、姫自身と姫を迎えにくる天人達の中に、「王とおぼしき」人から伝えられた。「昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来りける」とかぐや姫は翁に言った。また、「汝、幼き人、いささか功德を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、片時の間と思ひて下したりき……かぐや姫は、罪を作り給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり」と王は翁に厳しい口ぶりで話した。周知のように、「功德」や「罪」は仏教的要素であり、竹取物語が仏教思想を取り入れた最も重要な証だと言われる。高橋亨氏は「竹取の翁の〈富〉が、その具体的な事実が語られないまま『功德』によって合理化されたように、かぐや姫の『罪』は流離から逆に推測されたのだといえよう。その『罪』もまた仏教的な因果応報の論理にかなうが、それだけではない。物語史の核ともいうべき発想として、かぐや姫の『罪』と流離はもっと根源的な意味をかかえている」¹と論じていた。氏の指摘に触発されながら、竹取物語における罪の働きを考えてみたい。

第一節 日本従来の天人女房譚と竹取説話について

さて、羽衣型の原型に近いといえる文献資料として、いつも『竹取物語』と対比されるのは、『近江国風土記』逸文の伊香刀美の話である。白鳥となって天降った八人のうち、一番若い天女の「天羽衣」を犬に盗み取らせた伊香刀美は、天女と結婚して二男二女を得た。後に母となった天女は羽衣を探し取って天に昇ったという伊香連等の氏族伝承である。白鳥処女伝説との同一要素が明瞭である。また、奈具の天女においては、天女の醸んだお酒が万病除去の霊力を持っているため、老夫婦は大いに儲けたという致富譚の要素はあるものの、「功德」とは無関係で、「罪」の構造は見えなかった。奈具の天女も水浴に来て羽衣を盗まれて天に帰れないのであって、罪のために流されたのではない。伊香刀美の話ではさらに、「罪」とともに「致富」の要素も見られない。奈具の天女の言ったように、彼女は「私意から来つるにあらず。こは老夫等が願へる」のだから、地上に留まった。つまり、奈具の天女も、伊香刀美の天女も、かぐや姫のように地上に流刑されたのではなく、人間から無理矢理に地上に留められたのだ。両話も地上の側から一方的な欲望が異郷と地上との交通の話型に属している。

以上から分るように、天人女房譚には、流謫の発想がまず見当たらないのである。引き続き、「罪」を念頭に置きながら、竹取説話群に注目してみる。

竹取説話は古くから『万葉集』に見られる竹取翁と「九箇の娘子」の話がある。そして、院政期の『今昔物語集』、鎌倉時代初期の『海道記』、鎌倉・南北朝時代の『古今和歌集序聞書三流抄』や『古今集為家抄』などにも竹取説話が記されている。この四つの竹取説話において、姫が人間界に来た理由を見てみよう。

まず『今昔物語集』の竹取説話の原文を読んでみよう。

女ノ云ク、「己レ鬼ニモ非ズ、神ニモ非ズ。但シ己ヲバ只今空ヨリ人來テ可迎キ成リ。天皇速ニ返ラセ給ヒネ」ト。(中略)

其ノ女遂ニ何者ト知ル事無シ。亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有リケム、惣ベテ不心得ヌ事也、トナム世ノ人思ケル。

この竹取説話で登場する「女」の正体、またなぜ地上に降りたかという問題が残されたまま、話は終わった。

『今昔物語集』の竹取説話の不可知的な捉え方と違って、ほかの三つの話は姫が地上に降りた理由をこう語った。

此姫ハ先生ニ人トシテ翁ニ養ハレタリケルガ、天上ニ生レテ後、宿世ノ恩ヲ報ゼントテ、暫ク此ノ翁ガ竹に化生セル也。(『海道記』)

つまり前世の恩返しに翁のところに来たというのである。これは竹取物語で、翁に前世の「功德」があるから、姫が翁の家に育てられるというところに似ている。しかし、『海道記』のかぐや姫は「罪」を犯したから地上に来たわけではなく、ただ恩返しに来たことになっている。

『古今為家抄』と『古今和歌集序聞書三流抄』の場合は、姫は帝に應えて、「宮仕え」を受け止めた。そして、帝を離れる際に、姫は帝に向かってこういうことを語った。

我れ、これ、天女なり。昔、君に契りありて、今、かく妻となれりといへども、縁、既につきたり。下界にあるべきものならず。(『古今為家抄』)

吾は天女なり。君、昔、契り有りて、今、下界に下る。今は縁すでにつきたり。(『古今和歌集序聞書三流抄』)

姫は贖罪でも恩返しでもなく、「昔の契り」を果た

すために、地上に下ったのである。姫は結婚したという点は他の竹取説話と比べれば、異色だといえようが、この二つの竹取説話は天人女房譚に一番近いと思われる。なぜかという、両話は明らかに天界から来た女性が、地上のある男性と結婚し、そして男性が約束を破った、あるいは「縁」が尽きたことによって、女は男から去り、再び天上に戻ったというパターンに属している。

今まで見てきたように、天人女房譚や竹取説話には、天女がそれぞれの理由で地上に降りたが、罪を償うために、「賤しき」翁のところに来たのは竹取物語のかぐや姫だけである。

第二節 中国における女仙伝

日本の天人女房譚や羽衣説話において、流謫の話はあまり見られない。だが、中国では天人流謫譚が多く存在している。渡辺秀夫氏は『竹取物語』と神仙譚——初期物語成立史階梯』の中に、中国の『太平広記』女仙部に収載された天上界で犯した罪の償いに地上界に流された女仙の話——「妙女伝」「杜蘭香」「黄観福」「崔少玄」を挙げ、かぐや姫との類似を指摘している²。『太平広記』の巻 56 から巻 70 にわたって、86 話の女仙の話が載せられている。その中に、「罪」で地上に降ろされた女仙は渡辺氏が挙げた例のほか、また二つある。六つ罪に関わる話の原文を読んでみよう。

①「萼緑華」

緑華云：「我本姓楊」、又云是九嶷山中得道羅郁也。宿命時、曾為其師母毒殺乳婦玄洲。以先罪未滅、故暫謫降臭濁、以償其過。

②「杜蘭香」

臨昇天、謂其父曰、「我仙女杜蘭香也、有過謫於人間。玄期有限、今去矣」。

③「黄観福」

謂父母曰、「女本上清仙人也、有小過、謫在人間。年限既卒、復歸天上、無至憂念也。」

④「趙旭」

女笑曰、「吾天上青童、久居清禁。幽懷阻曠、位居末品、時有世念、帝罰我人間隨所感配」。

⑤「崔少玄」

(少玄) 曰、「少玄虽胎育之人、非陰鷲所積。昔居无欲天、為玉皇左侍書、謚曰玉華君、主下界三十六洞学道之流。每至秋分日、即持簿書來訪志道之士。嘗貶落、所犯為与同宮四人、退居静室、嗟嘆其事、恍惚如有欲想。太上責之、謫居人世、為君之妻」。

⑥「妙女」

(妙女) 言本是提頭頼咤天王小女、為泄天門間事、故謫墮人間。

これらの話に見える謫仙達は、師母のために乳婦を毒殺した萼緑華のほか、あるいは天人にはあるべからず欲念を持ち、あるいは天上の秘密を漏れたといった罪を犯し、地上に流謫された。それに対して、竹取物語では、かぐや姫も「罪をつくり給へりけれ

ば、かく、賤しきおのれがもとに」、しばらく過ぎた。もともと、かぐや姫が天(月)から降り、また天に帰って行く天女、女仙として設定されている以上、その話の背景に女仙譚があり、その型が用いられていることは、当然考えるべきことであろう。小嶋菜温子氏の言葉を借りれば、「罪は越境のための原動力」³といえよう。『竹取物語』の作者は今でも不明とされるが、中国の書籍や仏典に甚だ馴染んでいた人物だと考えられている。かぐや姫が地上に来た原因が天上で犯した罪を贖罪するためにあったということも『太平広記』のような漢籍からもヒントを得たと考えられるだろう。しかし、『竹取物語』は謫仙の諸要素を含んでいながら、中国のどの説話の翻案でもない。さて、「罪」はどのように『竹取物語』に独自性を与えて、『竹取物語』の達成に拍車を掛けたかという問題が浮かんできた。

第三節 物語性を生み出す「罪」

前述したように、中国の女仙伝には、「罪」はしばしば登場したが、天女は「罪」を犯して追放されるのは当然考えるべきことであろう。それは伝承をそのままに記したもので、作者の創作姿勢はどこにも見られないのである。しかし、『竹取物語』の作者はただの謫仙パターンに沿い、「罪」を取り入れたのではない。

罪で地上に追放された高貴な姫を竹の中から発見し、そして養う翁は「やうやうゆたかになり」、「勢、猛の者」になった。姫は貧しく、身分の低い翁に養われたが、翁に富をもたらした。だが、姫自身は「穢き」地上、あるいは「賤しき」翁の家で「かた時」を平穩に過ごせることができない。なぜなら、姫は世俗的な価値観を乗り越えなければいけないからである。

まず、五人の高貴な求婚者たちが残った時点で、翁はかぐや姫に結婚を勧めるが、そこで次のようなやりとりがなされる。

これ(五人の求婚者の熱意)を見つけて、翁、かぐや姫にいふやう、「我が子の仏。変化の人と申しながら、ここら大ききまでやしなひたてまつる心ざしおろかならず。翁の申さむこと、聞きたまひてむや」といへば、かぐや姫、「何事をか、のたまはむことは、うけたまはらざらむ。変化の者にてはべりけむ身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」という。

この翁の話に対する返答は、かぐや姫の物語における初めての発語である。たとえ「変化の人」であろうとも、養い親の恩愛を理解し、その話に従うべきだとする翁の説得に対して、かぐや姫は、自分は「変化の者」とも知らず、本当の親として慕ってきたと答えた。後の内容から見れば、かぐや姫に結婚の意志がないことは明らかだが、そこでかぐや姫は、表面的には、親に孝を尽くすという人間的愛情を大

切にする姿勢を見せている。また、翁はかぐや姫に「この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門広くもなりはべる」と、世の常の結婚の意義を説き聞かせる。それに対して、かぐや姫は「世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らではあひがたしとなむ思ふ」といって、五人の求婚者の「心ざし」の深さを確かめるため、「五人の中に、ゆかしき物を見せたまへらむに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらむと」難題を設けることにした。一見すると、男の「心ざし」がまだ信頼できないゆえに結婚をためらうという、人間の女性の心理と異なることはないように聞こえるかぐや姫の言葉は、自分が結婚しない意志を巧妙に覆い隠した。

異界に属する物だから、この世において、それらの物を手に入れるはずはないと確信を持っていた姫は、くらもちの皇子が持ってくる偽りの「蓬萊の玉の枝」に危うく騙されそうになった時、姫が「我はこの皇子に負けぬべし」、「物もいはず、頬杖をつきて、いみじく嘆かしげに」思っていた。幸いなことに、工匠の訴えにより、姫は苦しい羽目から脱出した。姫の願う通り、五人の求婚者が全部退けられたが、そのところへ、天皇が登場した。帝は様々の方法を尽くして、かぐや姫を手に入れようとしたが、姫は「宮仕へにいだしたてば死ぬべし」と決意し、「きと影になり」、不思議な能力を発揮して、帝の求婚をも拒絶した。だが、五人の求婚者と違って、かぐや姫は帝と「三年ばかり」「心をたがひに慰め」た。そして最後の姫が帝に残した和歌から、姫が帝に対して、やはり愛情を持っているということが分る。なぜかぐや姫はほかの女仙（例えば「崔少玄」「趙旭」）のように、とりあえず結婚し、そして罪障が消えたらまた天界に戻るという行動を取らないのか。

『古事記』の大穴牟遲の結婚の話などの難題譚の女主人公とも違って、かぐや姫は自身からいろいろ難題を出して、求婚者を拒み、そして、「あはれ」と思う帝をも拒否した。なぜ姫は終始結婚を承諾しないのか。考えてみれば、もしかぐや姫はほかの女仙と同じように、罪で地上に降ろされたが、人間と結婚し、最後に天上に戻ってしまうならば、『竹取物語』も一伝承あるいは説話になりがちではないか。

『竹取物語』では、求婚者に対して出された難題が、同時に難題を出した者への試練という性質を帯びて、かぐや姫を窮地に追い込み、その窮地を脱することこそ姫の贖罪になると考える。かぐや姫が予定された軌道を予定通りに生き、生かされていくだけだといえよう。

さらに、『今昔物語集』の竹取説話では、求婚者の失敗は「仮借する人々、女の形の世に不似ず微妙かりけるに耽て、只此く云ふに随て、難堪き事なれども、旧く物知たる人に此等を可求き事を問ひ聞て、或は家を出て海辺に行き、或は世を棄て山の中に入り、此様にして求ける程に、或は命を亡し、或は不

返来ぬ輩も有けり」という所ですべて終わってしまっているが、『竹取物語』では、五人の求婚者の個性が書き分けられ、五つの話がそれぞれ喜劇的效果を物語に与え、「上流貴族への諷刺という物語の旨が見える」⁴。そして、求婚譚の部分に関して、柳田国男氏は

然れば何れの部分に、竹取物語の文芸としての目途が有ったか。筆者その人の働きといふものは、果たしてどの点に現れて居るのか。斯ういふ疑問があるなら私には容易に答へ得られる。それは他を捜して類型の無い部分、もしも一々捜すのが厄介とあらば、主としては五人の貴公子が、無益に妻問ひをして結局は蹉跌と落胆とに終わったといふ、あの面白い五通りの叙述である。是には一つ一つ歌と一種の口合ひが附いて居て、目先をかへることに十分の力が用ゐてある。さうして此書以外には、前にも後ろにも斯ういふ類の話は無いのである。私たちは是を説話の変化部分、又は自由区域と呼ぼうとして居る。⁵

という興味深い論述をなされた。つまり、求婚譚の部分「話の自由区域」として捉えることができ、そこから作者の創作及び物語の虚構性が見られるのである。だから、物語の成立の面からして、求婚譚をなくしてしまうと、『竹取物語』という物語もただの説話、あるいは伝承にすぎないということになるのではないか。

以上述べてきたように、かぐや姫は罪のために地上に流され、その罰として、地上のルール（この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす）、そして地上の王権及び姫自身が帝を「あはれ」と思う心と戦わなければならない。即ち何があろうと結婚を絶対承諾しないことがかぐや姫の罪障を消滅するための試練になるということである。「罪」があつて、結婚を拒否しなければならぬ贖罪という贖罪の方法があつてはじめて、物語は五人の貴公子また後に登場した帝の求婚譚を展開することができ、創作としての『竹取物語』の物語性が生み出された。「罪」は『竹取物語』の成立になくてはならない要素だと考えられるであろう。

注

1. 「竹取物語論のために」『物語文芸の表現史』高橋亨 名古屋大学出版会 1987年
2. 『竹取物語』と神仙譚——初期物語成立史階梯 『平安朝文学と漢文世界』渡辺秀夫著 勉誠社 平成3年
3. 小嶋菜温子 かぐや姫の「罪」と帝——『今昔物語集』竹取説話の世界観から 『源氏物語の性と生誕』に所収。
4. 『貴族文学の時代』『文学に現はれたる我が国民思想の研究』津田左右吉著 岩波書店 1966年
5. 定本『柳田国男集』第六巻 筑摩書房版 1963年